ドラゴン・バスタード　その３

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラゴン・バスタード　その３

【Ｎコード】
Ｎ２６４０Ｏ

【作者名】
青木弘樹

【あらすじ】
伝説の剣士シンの弟の息子レイは、暗黒竜二世を打ち倒す決意をする。一方、ネオハルコンなる金属の存在を知ったグレンドはカイルと共にその金属を探しにいく。その帰り道、飛鳥と名乗る不思議な女性に出会うのだった。

作：青木弘樹

（前回の続きです）

「飛鳥…魔術師…？」
グレンドとカイルは、その女性を見ていた。少し悲しい目をしていた。
「飛鳥どの…しかし今なんと言われた？確か…父親が伝説の剣士シンと共に戦ったと…？」
「はい」
グレンドは驚いた。
「しかし…そのような話は…」
「私たちは、その力から、時に人から恐れられ迫害されることもありました。ですからゴールドランドからはるか南にある名もなき村でひっそりと暮らしていました」
「…」
「父は自分の存在が世に出ることを嫌い、シン様には自分の存在を世間に言わないようお願いしていたのです」
「…」
「しかし…父は死にました」
「どうして？」
「数日前、村が魔物に襲われたのです」
「！」
「私はかろうじて逃げることが出来ました」
「そうか…気の毒に…」
「私の力は風です。かまいたちのように切り裂くことも出来ます」

「さっきの魔術だな…」
「私には分かります。シン様の血筋の者が、いま育ちつつあると」
「…」
「時が来たら、またお会いしましょう。私も父の後を継ぎ、皆のお役に立ちたいと思います」
「そうか…それはありがたい」
「ところで、あなた方のお名前は？」
「グレンドだ」
「お、俺はカイルだ」
「グレンド様…カイル様…ですね。ではまた…」
そう言うと飛鳥は、少し浮き上がり、ゆっくり去っていった。
「…」
二人はしばらく、ボーっと見ていた。
「さて…とにかく帰ろう」
「そ、そうだな」
二人はシルバーランドに帰ることにした。
「なあグレンドさん」
「なんだ？」
「前にあんたの友人の…えと…」
「ファルコンか？」
「そうそう…そのファルコンって人が、占い師が城にやってきたって言ってたよな？」
「ああ」
「さっきの飛鳥って女がそうなのかな？」
「分からんが…たぶんそうだろうな」
「だよな」
二人は話をしながら歩を進めた。
「それにしても凄かったよな、あの魔術」
「そうだな」
「いとも簡単に魔物の腕を切り裂いちまうんだからな」

「…」
しかしグレンドが感心していたのはそれだけではなかった。確かに威力も凄い。だがそれ以上に、あの距離から的確に腕を狙い、切り落としたその正確さに感心していた。彼女が一緒に来てくれれば頼もしい戦力になる、そう思っていた。
そして二人はシルバーランド城に着いた。
「ふう。無事帰って来れたあ」
「カイル、君は少し待っていてくれ。城内でオリハルコンの剣を君に渡すわけにはいかないからな」
「オッケー」
グレンドは城内に入っていった。
グレンドはファルコンとレイの所へ行き、ネオハルコンを見せた。二人は驚いていたが、その力はまだ未知数だ。だからまだ何とも言えないという感じだった。
次にグレンドは剣を作っている職人の元へと行った。職人たちは驚いていた。実は職人たちの間ではネオハルコンの噂はあった。しかしオリハルコンすらなかなか手に入らない代物。ネオハルコンなど、そんなものは本当はないと誰もが思っていた。
しかしネオハルコンは存在した。職人の頭（かしら）でもあるドン・ドランはさっそくネオハルコンで剣を作り出した。ドン・ドランはうれしそうだった。自分の５０年の職人としての人生で、最高の剣が作れるかもしれないのだ。グレンドもその出来映えに大いに期待した。
そしてグレンドはオリハルコンの剣をかばんに入れ、カイルの元へと戻ってきた。
「待たせたな」
「いやいや」
「では約束の品だ」
「…」
カイルはオリハルコンの剣を受け取った。しかし、なんとなく申し訳ない気分だった。皆が戦おうとしているときに自分は金儲けの

ことばかり…。しかしグレンドは察した。
「遠慮するな。君のおかげですばらしいものが手に入ったんだ」
「そ、そうかい？すまないね」
「ところで、その知り合いの金持ちという人は、どこに住んでるんだ？」
「え？ああ…サザンの町だよ」
「ほう」
「そうだ！こうしよう！あんたたち、いずれブラック大陸に行くんだろ？」
「ああ。そういうことになるだろうな」
「だったら、俺が船を買って、船を貸してやるよ」
「ほう。それはありがたい」
「ブラック大陸に行く定期便なんてありゃしないからな」
「確かにな」
「せめて…それくらいはしないとさ、俺も気がすまないし」
「ははは…意外と律儀だな」
「世界が平和にならないと、みんな死んじまったら、盗賊稼業も飯の食い上げだからな」
「ふっ、世界が平和になったら、真っ先にお前を捕まえてやるよ」
「へへへ…」
二人は笑顔だった。
「じゃあ、またいつか会おうな。俺はサザンの町にいるから」
「ああ。気をつけてな」
カイルは笑顔で去っていった。
「さてと…」
グレンドは部屋に戻った。

ここはサザンの町から1キロほど離れた場所にある小屋。
飛鳥はここでひっそり暮らしていた。
「お父様、まもなくシン様の血筋の者が、大いなる武器を携え、邪

悪なる者を討伐に向かうようです。私も参戦し、必ずかたきはとってみせます」
水晶玉を見つめ、飛鳥は語っていた。
「お父様、どうか、天国から見守っていてくださいね…」

そして…三週間あまりが過ぎた。
レイはたくましく成長した。剣の技術もかなり向上した。しかし当然、まだファルコンに勝てるほどではなかった。グレンドもまた、決戦にむけて日々、鍛錬を重ねた。
そんなある日。
「ついに出来たぞ…」
ドン・ドランが言った。ネオハルコンの剣が、ついに完成したのだ。
「美しい…わしの人生で最高傑作じゃ。こいつはすごいぞ…」
ドン・ドランはしばらく見とれていた。たしかに美しい剣だ。心なしか、ぼんやり光っているようにも見える。
レイ、グレンド、ファルコンは、出来上がった剣を見るため、ドン・ドランの元へとやってきた。
「これが…」
「ネオハルコンの剣…」
三人も、ドン・ドランと同じように見入っていた。
「レイ、手にとってみろ」
グレンドが言った。
「は、はい…」
レイは剣を手にとってみた　。
「軽い…」
レイは驚いていた。
「軽いけど…それでいて不思議な重みと力を感じる…」
「そうじゃろう？わしもこんな剣は初めてじゃ。まさに究極の剣だと、わしは思うぞ」

ドン・ドランが、うれしそうに言った。

さらに一ヶ月ほどが過ぎた。

レイはかなりの腕前になっていた。顔つきも、以前より大幅にりりしくなっていた。やはり伝説の剣士シンの血筋だけはある。

「よしレイ、今日はここまでだ」

「はい。ありがとうございました」

「レイよ、明日私と勝負してみないか？」

ファルコンが言った。

「勝負…ですか？」

「ああ。レプリカの剣を使っての真剣勝負だ」

「…」

「そろそろお前も巣立つ頃だ。暗黒竜二世がいつ攻めてくるとも分からんことだしな」

実はすでに、ゴールド大陸は８割ほど魔物に制圧されていた。いずれシルバー大陸にも魔物たちはやってくるだろう。

「分かりました。お手合わせ願います」

レイは真剣な表情で答えた。

「よし。では今日は十分に休めよ」

「はい」

その夜。レイとグレンドの部屋。

「そうか。いよいよだな」

「はい」

「楽しみだ。お前の成長ぶり、とくと見せてもらうぞ」

「はい」

今までなら弱音をはいていたレイだったが、今は違った。もちろん心の中では緊張していたが。

「そういえばカイルさんは元気にしてますかね？」

「ん？そうだな、今頃、遊びほうけてるんじゃないかな」

「けど、船を貸してくれるって約束してくれたんですよね？」
「ああ。忘れてなきゃいいがな」
「大丈夫ですよ」
「そうだな」
「それと…前にグレンドさんが話してくれた飛鳥って魔術師…」
「…」
「どこに住んでるかも分からないんですよね？」
「ああ」
「本当に…一緒に戦ってくれればいいんですけどね」
「来るさ…」
「え？」
「きっと来る。なぜか…そんな気がする」
「…」
「さあ、もう寝よう。明日は大事な日だ」
「そうですね。おやすみなさい」

次の日。お昼前。
「それではこれよりレイ対ファルコン団長の真剣勝負を執り行う！」
グレンドが、声も高らかに言った。
「…」
二人は緊張していた。レプリカの剣とはいえ鉄製である。決して遊びではない。
「では、はじめ！」
二人は構えた。様子をうかがう二人。
「…」
ファルコンも、いつも以上に闘志がみなぎっていた。
しかし、昔なら震えていたレイも、震えることなく冷静に対峙していた。大したものである。
「やっ！」
ファルコンが打って出た。

”ギンッ！”
レイは剣を受け止めた。
「はっ！」
レイは剣を押しはじき、剣を横に振った。
「むっ！」
ファルコンはそれをかわした。そしてしゃがみこみ足払いを打ってきた。
「くっ！」
レイは軽く跳んでかわした。その瞬間、ファルコンは剣を下から上へと振りかぶった。
「くくっ！」
レイは体勢をくずしかけたが、バク転で後ろへ跳び、距離をとった。
「…」
グレンドや数人の兵士が見る中、二人は一進一退の攻防をしていた。みな、見入っていた。
「さすがだな、レイ」
「…」
しかしファルコンはすごい。技のキレが他の者とは違う。グレンドが認めただけはある。
「はっ！」
ファルコンが向かってきた。構えるレイ。その時
「はあ！」
なんとファルコンは高くジャンプした。よほどの自信がないと、こんな大きな動きは出来ない。
”ガキン！”
剣と剣が激しくぶつかりあう。
「…」
レイはまた剣を押しはじこうとした、その時、
「てい！」

ファルコンはレイの脇腹めがけて蹴りを出してきた。
”ガシッ！”
「くっ！」
なんとか腕でそれを防御した。するとファルコンは一度剣を引き、まっすぐに剣を突いてきた。
「！」
しかし、その瞬間、レイはとっさに剣を放し、その剣を両手ではさみ込んだ。
「なに！？」
まっすぐに迫ってくる剣を、白刃取りしたのだ。
「！！」
グレンドは口を開けて驚いた。
「はっ！」
そしてレイは剣をよこにずらしファルコンの腕を蹴り上げた。
”ガシッ！”
「うお！」
剣はファルコンの手から離れ、飛んでいった。
「くっ！」
体勢を立て直すファルコン。しかし
「！」
目の前にはすばやく剣を拾い、喉もとに剣を突き立てるレイがいた。
「！！」
グレンドは一瞬とまっていた。が、
「勝負あり！」
グレンドは叫んだ。
「はあはあ…」
レイはそのままの姿勢でまっすぐにファルコンを見ていた。
「ふう…まいった。俺の負けだ」
ファルコンは苦笑いで言った。しかし、どこかうれしそうだった。

「…」
レイも少し笑い、剣を戻した。
”パチパチパチパチ”
兵士たちは拍手をした。ようやく張りつめた空気が穏やかになった。
「ふう…」
レイは剣を置き、座り込んだ。
「レイ…お前はまったく大したやつだ」
グレンドがレイに近寄った。
「まったくだ。驚いたよレイ」
ファルコンもレイを称えた。
「いえ…きっとまぐれです」
レイは照れ笑いだった。しかしその顔に自信はみなぎっていた。
「いや、実力だよ。完敗だ」
「レイ。短期間でよくここまで成長したな」
「ファルコンさんのご指導のおかげです」
「ふふふ…」
三人は笑顔だった。兵士たちも、笑顔だった。希望の光が大きく輝きだした。みな、そう感じていた。このことは王様に伝えられた。王様もよろこんでいるようだった。この日の夕方、今度はレイひとり対兵士5人の試合もしたが、レイはあっという間に勝利した。
まさにレイは、その力を解放した。誰もがそう思っていた。

三日後。
「よし」
レイとグレンドは、ついにブラック大陸に行くこととなった。
「レイ、グレンド。気をつけてな」
「ああ」
「出来れば私も行きたいが、私にはこの城を守る責務があるのだ。すまんな」

「大丈夫だ、ファルコン。魔物が攻めてきたら、君はこの城をしっかり守ってくれ」
「ああ」
「ファルコンさん。ありがとうございました」
「レイ…君の力は本物だ。自分を信じるんだ」
「はい」
レイとグレンドは馬に乗り、出発しようとした。その時、
「おーい！ちょっと待ってくれー」
ドン・ドランが何かを持って走ってきた。
「ドン・ドランさん」
「はあはあ…間に合った。これを持っていってくれ」
それは緑色に輝く盾だった。
「ネオハルコンが少し余ったんでな。鉄の盾の表面にコーティングしたんじゃ」
「へえ」
「きっと役に立つはずじゃ。持っていってくれ」
「分かりました。ありがとうドン・ドランさん」
「うむ。気をつけてな」
そうして、二人はまずサザンの町に向かった。カイルが待つサザンの町へ。

ここは飛鳥の住む小屋。
「…」
飛鳥は感じていた。
「間もなく…来るようですね…。シン様の後継者様…そして、グレンド様…」
飛鳥は目を閉じ、精神を集中していた。

レイとグレンドは馬を借り、サザンの町を目指していた。
「カイルさん、どんなになってるかな？」

「全身、ど派手に着飾ってたらどうする？他人のフリするか？」
「ははは、そのほうがなんとなくあの人らしいけどね」
「そうだな。それにそのほうが見つけやすい」
緊張をほぐすためか、二人は談笑しながら進んだ。その時、
「ん？」
ふと見ると、テントがあった。
「なにかな？グレンドさん」
「旅人だろう。休憩でもしてるんだろ」
「…」
テントを通り過ぎて、数秒後、誰かが話しかけてきた。
「そこの旅のお方？」
二人は止まり、振り返ってみた。
「やはり…グレンドどのではないですか」
「お前は…」
なんとそれは旅の商人のコーネルトだった。
「生きていたのか」
グレンドは驚いた。
「ええ。なんとかね」
コーネルトは笑顔だった。
「グレンドさん、誰なの？」
「ああ。君がノボス村にいるという情報をくれた旅の商人だ。ゴールドランド城の惨劇のとき、ゴールドランド城にいたはずだから、もう死んでいると思っていた」
「ふうん」
「グレンドどの、そちらが伝説の剣士シンの血筋の者、レイですな」
「そうだ」
「ふむ。いい目をしていらっしゃる」
「はじめまして。コーネルトさん」
「なるほど、なるほど…」
コーネルトの様子がおかしかった。

「しかし…よくあの惨劇から逃れられたな、コーネルト」
「ええ…まあ…」
コーネルトは笑っていた。なにやら不敵な笑みだった。
「そうかそうか…しかしこうでないと面白くない…」
「？」
グレンドは何を言っているのか意味が分からなかった。
「暗黒竜二世様も、首を長くして待っておられることでしょう」
「なに？」
「では…私はあなたをかたづけておきましょう…グレンド」
「なんだと！？」
そう言うとコーネルトは、なんと魔物へと姿を変えた！
「貴様…！」
なんとコーネルトは魔物だった。肌の色が赤く変わり、頭から角も生え、両手が剣の刃のような形になった。
「レイ！馬から下りろ！」
二人は馬から下り、戦闘体勢に入った。
「ふふふ…驚いたか？私は暗黒竜様の命令でお前たちをずっと見ていたのだ。空からな」
ずっと空から見ていた魔物は、こいつだった。
「ふん。魔物が…まわりくどいことを」
「そのレイという者が一人前になってくれないと、暗黒竜様も張り合いがないからな」
「ふっ…それが後悔することになるとも知らずに」
「かつてシンが勝ったのはまぐれだ。お前ごときでは暗黒竜様には勝てんよ」
「…」
レイはコーネルトをにらんでいた。
「しかしお前は暗黒竜様の獲物だ。私の獲物はグレンド、お前だ」
コーネルトは剣の刃となった手をグレンドに向けた。
「よかろう。お前はこのグレンドが、このポセイドンの槍で地獄へ

送ってやるわ」
「ふふふ…」
グレンドもコーネルトも、両者ゆずらずな態度だった。
「グ、グレンドさん…」
「心配は無用だレイ。私もお前のようにずっと鍛えていたのだからな」
「は、はい…！」
「お前は離れて見ていろ」
「はい！」
グレンドとコーネルトの戦いが始まった。

その頃。ここは飛鳥の住む小屋。
飛鳥が精神を集中し、自らの魔力を高めていたその時、
”ビシッ”
水晶に亀裂が入った。
「はっ！」
飛鳥は不吉な予感がした。
「まさか…」
飛鳥は急いで小屋を出た。これはいったい何を示しているというのだろうか…。

つづく☆

（後書き）

その５まであります
よろしくお願いいたします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2640o/

ドラゴン・バスタード　その３

2010年10月11日19時10分発行